



歴史に学ぶ

高石工業(株) 代表取締役 高石 秀之

昨年3月11日の東日本大震災から一年になります。被災に逢われた方々には復興に向けてまだまだ大変な日々が続くかと思えます。少しでもお役に立てたらといつも思っております。

先日、一年がかりで「徳川 家康」全26巻を読み終わりました。この小説は世界最長の小説としてギネスブックに載っているそうです。著者の山岡 荘八は書き上げるのに昭和23年からなんと18年もの歳月をかけています。徳川 家康の生涯を丹念に描くと共に、戦後日本の復興の中でいかにして国の形があるべきか、リーダーがあるべきかを重ね合わせて提示しています。

そういえば私が子供の頃、父の書齋の本棚に文庫版があったのを思い出します。家康はタヌキおやじの嫌なイメージしかなかったので、その当時は読む気にもならず「やけに長い小説だな〜」くらいに思っていました。半年くらい前に、いつもお世話になっている人に「経営者にとっていい本だから、読んでみたらいいですよ」と勧められて、読み始めました。

すると出てくるは出てくるは、名言のオンパレードです。「人の将たるものは、常に洩る船、燃える屋根の下にある心構えを忘れてはならない」「勝つことばかりを知って、負けることを知らざれば、禍その身に至る」などなど、人の上に立つ者の心構えがたくさん散りばめられています。

それにしても家康は苦難の連続ですね。織田と今川の板挟みで苦勞し、家系で苦勞し、妻で苦勞し、上司で苦勞し、部下で苦勞し、子供で苦勞し、親戚で苦勞し、組織で苦勞し、宗教で苦勞し、海外との付き合いで苦勞し、それでもへこたれずに天下泰平に導くのです。

世間の試練など、ものの数ではありません。苦勞でさえないのかもしれませんが。いくつになっても人は悩むんだな〜、と考えると気が楽になります。

物語の後半には重要な登場人物として、茨木の片桐 且元も出てきます。大阪夏の陣を止められなかった無念さも十分に描かれています。一読の価値ありと思えます。

また先日、歴史家の加来 耕三さんという方の講演会に行きました。加来さんのお話では、歴史を丹念に検証する事で、これから何が起こるかを予想する事ができるそうです。そのためには、なぜそうなるのか、もしもそうでなければどうなのかを、立ち止まってものを考える事が大切なのだそうです。実際の歴史には講談や小説のような奇跡や偶然といった事実の飛躍はなく、現実と常識を積み重ねてできるものなのだとか。

織田 信長はなぜ桶狭間で十倍もの今川軍に勝つことができたのか。坂本 龍馬はなぜ薩長同盟を結び、回天の業を成し遂げられたのか。説得力のある例を引きながら、巷間伝えられている常識を疑うこと、それが今も非常に有効であることを語ってくれました。昨日があるから今日があり、きょうを生き抜くから明日がある。故事を訪ね、いまは起きようとしている兆しに気づくのが本当の歴史の使い方のようなのです。

家康も歴史家の講演も、そのまま日々の仕事に生きるものだと思います。古いものは新しい。先の読めない激動の時代ではありますが、この気持ちを胸に、創業の精神に立ち返ってまた今日を生きたいと思います。